

「就職に強い大学」をめざします



『わが子の就職を考える保護者セミナー』

大阪教育大学は“就職に強い大学”をめざし、学生への就職支援を中心に担う、キャリア支援センターを昨年4月、設立しました。また、就職支援を図るだけでなく、社会の各分野、最前線で活躍する卒業生を多く輩出できるよう、教育・研究活動の充実にも力を入れています。

就職実績に対する保護者の厳しい目

大手広告会社が実施した昨年の調査によると、“良い大学”の条件として、「就職支援の面倒見がよい」が最も多く41.9%、次いで「卒業生が社会で多く活躍している」が36.3%という結果となりました。それを裏づけるものとして、本学が昨年9月に実施した「わが子の就職を考える保護者セミナー」でも、約400人の保護者が集まり、本学の就職支援の状況に強い関心を示されました。

学校現場ではいま、教員の大量採用時代に入っており、教職志願者にとって“広き門”となっています。ただし、私立大学が教員養成系学部等を創設するなど、本学としても傍観してられる状況ではありません。また、学校現場や教育委員会から即戦力を有する学生を養成するよう求められており、それらに対して、何らかの手段を講じる必要性が出てきている状況です。

“即戦力”を求める傾向が浮き彫りに

一方、ここ数年の企業就職状況は、“買い手市場”となり、全国の大学生が悪戦苦闘しています。このことは大阪教育大学生にとっても例外ではありません。

長引く不況で、企業が人材育成の余裕を失っていることなどから、即戦力を求める声が企業から高まっています。経済同友会が実施し

た昨年の「採用と教育に関するアンケート」でもそのことを裏づける結果が出ています。

また、企業数社を訪問し、率直な意見をうかがいましたが同様の結果となりました。このことから、学校や企業も、“即戦力”につながる資質を備えた人材を送り届けてほしいと、今の大学に厳しい要求を突きつけているのがうかがわれます。

学校、企業が求める人材像は

では、学校現場や民間企業が求める人材像はどのようなものか、それぞれの方々にお話を聞きました(2～3面掲載)。また本誌では5～7ページに、就職活動で実績をあげた学生のインタビュー記事を掲載しています。

(広報室)

(参考) 過去3カ年 就職状況[教員養成課程(第二部含む)]

区 分		平成20年 3月卒業	平成21年 3月卒業	平成22年 3月卒業
公立学校	小学校教員	269	267	254
	中学校教員	34	48	65
	高等学校教員	20	15	26
	幼稚園・特別支援学校教員	15	20	34
私立学校教員		29	30	27
教 員 計		367(60.4%)	380(61.8%)	406(67.0%)
企業就職		76(12.5%)	67(10.9%)	36(5.9%)
公務員		15(2.5%)	16(2.6%)	12(2.0%)
進学(大学院等)		46(7.6%)	63(10.2%)	66(10.9%)
未就職・不明等		103(17.0%)	89(14.5%)	86(14.2%)
合 計		607	615	606

(参考) 過去3カ年 就職状況[教養学科]

区 分		平成20年 3月卒業	平成21年 3月卒業	平成22年 3月卒業
公立学校	小学校教員	6	2	5
	中学校教員	35	45	33
	高等学校教員	15	14	21
	幼稚園・特別支援学校教員	2	3	5
私立学校教員		18	17	13
教 員 計		76(17.8%)	81(18.2%)	77(18.2%)
企業就職		198(46.5%)	173(38.9%)	140(33.1%)
公務員		11(2.6%)	22(4.9%)	13(3.1%)
進学(大学院等)		63(14.8%)	84(18.9%)	82(19.4%)
未就職・不明等		78(18.3%)	85(19.1%)	111(26.2%)
合 計		426	445	423

教育委員会、

とりの教員がこんな子どもを育てたいというポリシーをもたなければいけない」とし、「このポリシーは大学を卒業するまでに身につけてほしい。子どもが好きだけでは教師としてはやっていけない。その先に一步踏み込んでいかなくてはプロの教師とは言えません」と指摘します。その1つの解決策として「一人ひとりの体験を通じた成功事例と失敗事例の共有化が必要です。大学レベルで1回生から先輩後輩との年齢の異なる者同士のつながりのなかでそういう情報を交流するシステムが求められます。授業でのワークショップや教育実習の過程のなかで作れるのでは」と提案します。そのうえで、「大阪教育大学が地元・大阪に貢献する大学となっていきたい」と締めくくりました。

「未来をつくる」教員に

平成22年度から教員採用を単独で実施している堺市教育委員会総務部教職員課総括管理主事の浅野浩司さんは、「堺市では“情熱”“指導力”“人間力”の3つを兼ね備えた人材を求めています。教員採用のキャッチフレーズ“未来をつくる”には、子どもたちの未来、教育の未来、そして堺市の未来をつくるという意味が込められています。本市教員採用選考では、受験者の“ゆめ”と“よさ”をしっかりと受けとめます。筆答テストでふるい落とすことはせず、全員にすべての試験を受験していただきます。また、面接を重視し、模擬授業を含む個人面接及び集団討論を行います。採用選考全体の50%のウエイトがある面接試験では、教育にかける“ゆめ”と、あなたならではの“よさ”を自分の言葉で語ってほしいのです。そのために、大学では勉強はもちろん、ボランティアやサークル活動など、幅広い経験を積んで、わたしたちに訴えかけてください。皆さんには、学生時代にしかできないことがあります。荒削りでもいい、自ら伸びていこうとする意欲ある人材を求めています。堺市では、教員が育つ堺(学校)をめざし、“堺・教師プロ塾”や専門指導員による指導体制、オン・ザ・ジョブ・トレーニングなど、教員が育つ環境づくりに力をいれています。ぜひ、皆さんの教員としての輝かしい未来を堺で花開かせ、活躍されることを願っています」と強調します。

学校現場が求める人材像は

今年の教員採用選考試験も、まもなく本格的に始まろうとしています。そこで、学校現場が求める人材像はどのようなものか。教育委員会の担当者にお話をお伺いしました。

「子どもに向き合える即戦力を求めたい」

大阪府教育委員会市町村教育室長の藤村裕爾さんは、学校が求める教員の資質として3点挙げています。「子どもと共感できる豊かな人間性。専門的な知識・技能に裏打ちされた指導力。保護者や地域の人々、同僚と連携して信頼関係を築く社会性」さらに、言葉を継いで、「新任1年目から先輩教員に伍して、先生として子どもと保護者に向き合うわけですから、始業式のその日から、教壇に立ち先生として子どもと向き合える実践力、それも即戦力であって欲しいと考えます」と強調します。

初めて経験する学級運営や保護者対応など、新任教員のプレッシャーは大変なものがあります。また、大阪の教育には、学力や体力、生活指導など、課題が山積しています。藤村さんは「若いというだけで歓迎されるほど、今の学校は甘くありません。厳しいようですが、先生になるということは、よりよく生きたいという子どもの願いに応え、子どもの人生に関わっていくという自覚と、ある意味の覚悟が必要です」と語ります。一方で、「先生という仕事は、確かに厳しい仕事ですが、子どもの成長が目当たりに体

験できますから、それを上回る、日々の感動があります。人は人との間で育ちます。教員も同じ。子どもから学び、仲間や上司に助けられながら成長していきます。常に学び続け、成長し続けようとする先生であって欲しい」と期待を語ります。

最後に、「大阪の多くの教員を輩出してきた大阪教育大学への期待として」、次のように提言をされています。「大学にも教育委員会にも学校にも、教員育成に以前よりスピード感が求められています。子どもや保護者、学校現場の期待に応える教員の資質・能力とは何か。そのような力をどのように育てていくのか。大学が、教育委員会や学校としっかり議論していくことが必要です」

「教員養成で大学と密接なコラボを」

大阪市教育センター首席指導主事の沢田和夫さんは、「即戦力は大事だが、将来のことを考えると、人との関わりの中で磨き続けていく教師力が重要です」と「即戦力至上主義」には否定的です。「大学と学校現場が教員像を共有し、基礎力、人間力をもった教員を育成するために、大学側とわれわれ教育行政とのコラボレーションがなにより大切です」と言われました。

沢田さんは若手教員の研修を担当する機会が多いことから、出会う若者たちの特徴として「失敗体験が少ない、成就感を得た経験がない」と指摘します。「教師として成長し、子どもや保護者から信頼を得るためには3、4年はかかります。一人ひ

キャリア支援センター長 入口豊教授のメッセージ

本学では、学生のキャリア教育の充実と就職支援強化をめざして、平成22年4月から新たに「キャリア支援センター」を設置し、教員採用試験対策はもちろん、一般企業や公務員試験など、多様な職種に関する就職ガイダンスやセミナー等を積極的に開催し、より一層「就職に強い大学」をめざしています。

①全国トップレベルの教員就職率

本学は、2009年度に新制大学として開学60周年と明治7年教育伝習所開設以来の創基135周年を迎え、小学校・中学校教員はもちろん、幼稚園・養護教諭・特別支援学校教諭を含め、すべての学校種別と教科を網羅する西日本最大の教員養成大学として学校教員を中心にすでに約5万人を超える卒業生を輩出し、教育界においては圧倒的な歴史と実績を残してきました。

近年の団塊世代教員の大規模退職の影響もあり、大阪府を中心に大都市圏の教員需要は増大しており、小学校を中心に教員採用はかなり有利な状況にあります。ここ

数年、本学は「正規採用教員合格者数」では全国トップクラスを誇っています。

文部科学省発表の平成22年3月卒業生の全国国立大学教員養成系大学・学部教員就職率は、教員養成課程の学生定員に対する本学の就職率は70.0%で全国第6位にランキングされていますが、本学の全教員志望者数537人を母集団にすると、正規教員合格者317人、期限付講師等採用者194人、合計511人で、全志望者の実に95.2%にのぼり、非常に高い就職率を残しています。有名私立大学の教員養成分野への大量進出もあり予断は許されませんが、当センターは、今後も教員就職率100%をめざして、様々な支援策を計画していきます。

②企業・公務員試験対策にも力点を置く

また、本学は1988年に、新たに教員免許状取得を主たる目的としない、豊かな教養と個性、創造性をもってこれからの社会に貢献できる人材の育成をめざす全国教育系大学でも最大規模の「教養学科」を創設し、すでに約7

千人の卒業生を様々な職業分野に送り出してきました。

この教養学科を中心に、毎学年約1000人の3割弱にあたる学生が、教員就職以外の企業や公務員への就職をめざしており、教員養成系大学でありながら、一般企業にも毎年200人を超える就職者を出しております。就職先も多岐にわたり、大手だけでなく、中小企業にも優秀な人材を多数送り出しており、採用企業からも絶大な信頼を得ています。

このため、当センターでは、企業就職ガイダンスを皮切りに、業界研究セミナーや合同企業セミナーなどを実施するとともに、エントリーシート添削指導や面接指導等が受けられるよう体制を整えています。今後も引き続き企業の期待に応えられる優秀な人材を輩出していきます。

「キャリア支援センター」は、今後も大学生生活のあらゆる場での学生のキャリア・アップと職業選択を支援することを目的により実践的な就職支援プログラムを展開し、「本学だからできるきめ細かいキャリア支援」をめざしてまい進いたしますので、皆様の一層のご協力をお願いいたします。



企業担当者、就活学生にインタビュー!

今年度、本学で実施された企業合同セミナー、会社訪問など学生たちの真剣な表情が光ります



「選ばれる力と選ぶ力」

企業の就職活動は、大学3年生の12月頃から企業へのエントリーが始まります。大企業の中には、新卒採用時期の早期化を改善すべきだという議論はありますが、一方では、早い時期から就職活動をスタートさせることでモチベーションを高めることも大切だとされています。本学キャリア支援センターでも、1分間スピーチや、自己分析、エントリーシートの添削など早い段階から指導しています。そこでのポイントは「企業に選ばれる力を高めるだけでなく、学生自身の選ぶ力を育むという視点が大切です」(川瀬英作キャリアアドバイザー)

「就職はゴールでなく、人生の始まり」

本学では、毎年合同企業セミナーを柏原キャンパスで実施しており、4日間実施した今年の参加企業数は計60社、学生は計342人参加しました。**＝写真＝**
「就職はゴールではなく、人生の始まり」。どの企業採用担当者もそうメッセージを送ります。採用担当者の声を紹介します。

「失敗をおそれないたくましさ」

本学出身者を毎年採用いただいている株式会社関西アーバン銀行(本社・大阪市中央区)では、現在、卒業生25人が勤務しています。常務執行役員人事部長の松村昭夫さんは「チャレンジ精神があって仕事に前向きに取り組む人材を求めています」また「指示待ちではなく自ら考えて自ら行動する人。失敗をおそれないでいただきたいのです。失敗して上司から叱られてもいいじゃないですか。プロ意識と夢を持ち続け、挫折を乗り越えて歩みを重ねるたくましさ」を求めています」と強調されます。「加えて、『協調性』と『コミュニケーション力』も大切です」。同銀行では、人材育成のための研修プログラムが充実しており、集合研修と職場内研修(OJT)に加えて、自己啓発支援も積極的にを行っています。

「変化に対応するスピード感、わくわく感を」

同様に本学卒業生を採用されている株式会社ノエビア(本社・神戸市中央区)では、人にまっすぐ向き合おうとする人材育成に取り組む本学に期待します。

人事部の森本満夫さんは「SPEED・CHANGE・CHANCE」の3つをキーワードに新卒採用を行っています。化粧品と密接な関係のあるファッションのトレンドは次々と新しく変わりますから、業務はスピード感が求められます。ですから、指示待ちではいけません。与えられた仕事を無難にこなせばいいというのではないのです。むしろ失敗してもよい。失敗を次の機会に生かせるような人、自分で判断しアグレッシブに行動する人材を求めています。弊社は女性に支持される会社でなければなりません。企業理念に「女性の地位向上と男女平等の実現」を掲げています。社員募集は総合職(営業職・インストラクター職)で、男女を問わず採用する予定です。求めたいのは、仕事や商品にわくわく感や期待感をプラスできる人。遊び心をもって、お客さまにまっすぐ向き合える方を求めています」

「実行力、心身ともにタフであること」

「企業にとっての新入社員の採用というのは、とても大きな勇気のいる投資です」という株式会社ベネッセコーポレーション人財部の鬼沢裕子さんは「10年後に事業現場の最前線を担い、20年後、30年後には企業の経営をリードしてくれるような人を見つけそこに投資をしていくことになるからです」と「人財育成」の大切さを強調します。そのうえで「新卒の学生の方に当社が求める要件の第1は、自ら課題を発見してそれを解決できる力を持っているということです。与えられた課題を解決していくだけではなく、自ら問題を見出し、そこに仮説を立て解決に向けて実行できる力が仕事を進めていくためには必須です。第2としては心身ともにタフであることです。ますます変化の激しくなるグローバル社会のなか、予測しきれない状況があっても果敢に新

「就活は孤独なんかではない」

教養学科 平野 圭祐さん

薬品メーカーの内定を得た平野圭祐さん
＝写真＝(教養学科自然研究専攻・生命科学コース)は、開口一番、就職体験をこう語ってくれました。

就職活動は孤独で苦しいという印象があることについて、「多くのメディアが苦しい、厳しいというイメージを強調しすぎるように思います。また、大学生自身も何でもかんでも有名大手企業にエントリーしておこうという姿勢があるように思います。関西には将来性豊かな中小企業がたくさんあります」と強調します。「就活学生は同じ就職戦線をたたかう仲間であるはず。ライバルと思わず、面接会場などで出逢ったときは気軽に情報を交換するといいと思います」

そのうえで「大阪教育大学出身だと文系と見られてしまいます。わたし自身理系の学生なので、その説明もしました。大阪教育大学に対するイメージが教員採用＝文系とされすぎるように思います。教養学科には理系の学生もいるのだということを、大学として企業側にアピールしてほしい」と要望します。最後に「(入社式まで)英語をマスターするようにと指示されました。一生懸命しているところです。4年間の間に英語をしっかり勉強しておくといいと思います」と後輩にメッセージを送ります。

同じ就職戦線をたたかう仲間を大切に



しいことにチャレンジしたり、困難があっても諦めず試行錯誤や工夫を重ねてやり抜けるたくましさ求めます。もちろん教育という社会性の高い事業を柱としている当社では、誠実であることや、コミュニケーション力が高いこともとても大切な要件となります」と話します。

STUDENTS NOW!

ペンギンを題材にボールペンでイラスト

白井 三賀さん

教養学科芸術専攻芸術学4回生(3月卒業)

なぜペンギンを描くのですか。

白井 かわいい。二足歩行で人間みたい、でも人間じゃない。そんなところに惹かれました。4月からはイラストレーター“ペンギンペン画作家”の「shirapen」として生きていくことにしています。

絵との出会いは。

白井 小学校までは芝居やミュージカルに熱中し、中学校に入ると絵に興味が湧きました。自分を表現したいという思いが強かったのだと思います。美術部で活動し、大学2回生のときにアトリエに通い始めるようになりました。手づくり市やアートバザールに自分のお店を出して、ポストカードやグッズとして売り出したところ、子どもや女性から「かわいい」と評判をいただきました。

ペンギンを題材に選んだというのはユニークですね。

白井 最初は人間を描きたかったのです。でも描いているうちに違和感が…。小さいときから、父親に連れられて水族館に通っ



ていました。魚などの水生生物が好きになりました。ある日、ペンギンの水槽の前に立ったときのことです。水中で泳いでいるペンギンと目が合いました。するとインスピレーション。「ぼくを描いてくれ」と。

次に、画材を何にしようかと考えました。水彩、パステル…？ もの足りない。ボールペンで書いてみたらしっくりいきました。道具は黒のボールペンとスケッチブックだけなので、電車の中でもどこでも描くことができます。紙とペンだけの世界ですが、そこから、人を驚かせるような作品を生みだそうと日々、努力しています。

自分の想い、考えを紙に表現する

藤井 友理香さん

教員養成課程中学校書道専攻(2年)

書道と出会いは。

藤井 幼稚園の頃です。書道教室で硬筆(鉛筆)を初めて習いました。小学校2年生のときには、初めて筆をもちました。友だちがやっていたので一緒にわたしもやってみようかなという軽い気持ちでしたが、やっていくうちに楽しくなり、のめり込んでいきました。

進路と関わって、本格的になったのが私立高校(岡山県)の書道コースに進んだことです。教職はこの頃に意識し始めました。

書道の魅力は。

藤井 自分の想い、考えを紙に表現できるところです。習字では、手本通りにきれいに書くことが良いとされますが、経験を積むと自分の感情、テーマを作品にする過程が面白くなります。ですから、その日の気分や体調によって作品の出来が左右されます。調子が出な

いときは早々に切り上げてしましますが、モチベーションが上がったときは何時間でも没頭してしまうことがあります。今、テーマにしているのは昔の有名な書家、現代作家の字を集めて、それを参考にアレンジし、自分なりの表現に創作することです。

将来の夢は。

藤井 中学校の国語の先生になることが目標です。書道の先生にも憧れています。書道を通じて感じたこと、学んだこと、書道の面白さを子どもたちに伝えていきたいです。

「教員になりたい」という強い思いを感じました。なりたいと思うものに人は必ずなれると思います。あと2年、頑張ってください。



なにか目標をやり遂げた経験はきっと役立つ!

教養学科を選んだ理由は。

今津 国立大学で社会、中でも法学を勉強したいと思っていたところ、教養学科に人文と社会文化コースがありました。大学のホームページで、社会文化コースの教育活動を紹介する記事があり、地産地消の活動に取り組む大教生の紹介が目にとまりました。ぼくもやってみたいと思いました。

クラブ活動の陸上でも頑張ったのですね。

今津 陸上(円盤投げ)をやりたいからです。大阪教育大学は陸上が強いと聞いていたので、それも選んだ理由の1つです。在学中は、競技活動とともに、会計も担当し、100人近い部員やOBとのやりとりなど、人との対応を学びました。

旅行会社ということですが、海外旅行が好きなのですね。

今津 なんでも見てやろう、知らない世界にとび込んでやろうという好奇心が強い

ので、アジア諸国はもちろん、去年は、ひとりでスペインからモロッコを旅しました。広大なサハラ砂漠や標高3,000~4,000m級のアトラス山脈をバスで越えたりしました。現地の人との出会いが楽しかったです。ガイドブックをなくして困ったのですが、体当たりで乗り切りました。ある意味、面白かったです。

すごい度胸ですね。これから就職活動に向かう後輩へのメッセージを。

今津 陸上部の活動をやりながら就職活動をしました。マスコミ(新聞社、出版社等)、や旅行会社などを志望していたのですが、何社か面接や最終まで行って、結局、旅行会社になりました。

大学4年間の間に、いろいろな人と出会うことが大切だと思います。それは、ぼくのようにクラブ活動や旅行でなくてもいいと思います。人との対応の中で、相手が何を聞きたがっているのか、何を言いたいのかを



教養学科 文化研究専攻 社会文化コース
今津 歩さん(22歳)
大手旅行会社に内定

つかむ力、コミュニケーション力が身に付いたと思います。また、なにか目標をやり遂げた経験は、かなり採用担当者から評価されたと思います。就職後も役に立つのではないかと考えています。

YOU CAN DO IT!



卒業予定者INTERVIEW

「つらいことがあるとしても、あきらめずに進んで!」

教師をめざしたきっかけは。

村田 中学生のとき、仲のよかった友人がストレスから、過呼吸症候群の発作をしばしば起こしていました。そばにいて心配しても対応できず「思いやりだけでは人は救えない」と無力感を感じました。「子どもたちの心と体を救う専門家としての技術と知識を身につけたい」その思いが、わたしを教職に向かわせました。

大学時代の4年間はいかがでしたか。

村田 友人、先生にも恵まれました。勉強も遊びも、ボランティアも一生懸命にやりました。楽しかったので、卒業したくないくらいです。

4月から学校に赴任しますが、不安や期待はありますか。

村田 子どもたちの大切な命を預かるという責任感を強く感じています。赤十字の講習会に通い、心肺蘇生法などの救急救命

措置を学びましたが、夢の中でも子どもたちに心肺蘇生をしている場面を見ることがあります。

養護教諭をやっている先輩から「命を預かる責任の重い仕事を担っているということは、何年、勤務しても感じ続けておかなければならない」とアドバイスされ、強く受け止めました。また、性教育やカウンセリングマインドにも関心があり、まだまだ学んでおく必要があると感じています。

後輩へのメッセージを。

村田 わたしもそうですが、将来に同じ夢をもつ仲間を大切にしてほしいと思います。教員採用試験に臨んでいる間、面接の実演をし合い、批評し合って互いに励まし合いました。つらいことがあるとしても、どんな経験もすべて自分の糧となるので、夢をあきらめずに進んでほしいと思います。



養護教諭養成課程
村田 美陽子さん(22歳)
▶▶ 大阪府・養護教諭採用内定

大学時代は2度とないので、思い切り楽しんで!

教養学科に入学したきっかけは。

上田 高校時代は、はっきりとした将来像が決まっていなくて、文学部や社会学部など、幅広く勉強できることをめざしていました。教職も視野に入っていましたので、教養学科だったらいろいろな勉強ができるのではないかなと思いました。その通り、社会福祉を中心に人に関する勉強をさせていただきました。特に精神科の先生でもあるゼミの教授の授業に強い関心を持ちました。

4年間の学校生活はどうか。サークル活動も参加したのですか。

上田 ひと言でいうと「楽しかった」です。バレーボールのサークルに参加していましたので、一生つきあうことのできる友だちや先輩、後輩がたくさんできました。本当に入ってよかったです。

就職氷河期の再来といわれ就活は大変だったと思いますが、メーカーに就職が決まったそうですね。

上田 めっちゃ頑張りました。最初はメーカー、金融、商社など、広くアタックしていましたが、途中で絞っていきました。採用試験で出会った企業の人事担当者の方や、本学のキャリア支援センターの先生などからアドバイスをいただき、わたしはメーカーに向いていると気づきました。

後輩へのメッセージを。

上田 わたし自身、エントリーシートには笑顔アピールし続けました。いつも笑顔だと言ってもらっていたからです。そして、それが功を奏したように思います。就職活動では、何か自分はこれだというセールスポイントをもつことが大切かなと思います。大学時代は2度とないので、がんばるところはがんばって思い切り楽しんでほしいと思います。



教養学科 人間科学専攻 発達人間福祉学コース
上田 浩子さん(22歳)
▶▶ 調理家電メーカーに内定

YOU CAN DO IT!

卒業予定者INTERVIEW

いろいろな経験をしてほしい!

教師をめざしたきっかけは。

平野 中学2年のクラスでは、班を中心とした仲間づくりの取り組みで、新聞発行や行事もすべて、班や学級を中心とした活動でした。みんなでクラスを築きあげたという実感があります。高校に進んだ時には、みんなで力を合わせて達成することの楽しさを知ってもらいたいという考えを持ち、大阪教育大学が第一志望になりました。

大学時代の4年間はいかがでした。

平野 ラクロスというスポーツをご存じですか。ラクロスサークルを通じ、入った当時は知名度も低く小さかったサークルを、4年間で大きく発展させていった経験や、チーム競技で練習や試合のビデオをメンバーと一緒に見ながらやりとりし、時に言い合った経験は大きいものがあります。教員採用試験の面接練習で集まった兵庫県人会も大切な仲間です。一つの同じ目標に向かって夜な夜な

練習を続けたり、遊んだりしたことは一生の思い出です。

学校赴任に期待や不安はありますか。

平野 子どもたちと出会うのは楽しみです。緊張と不安もあります。自然学校や算数指導、子どもと触れ合える機会は作りましたが、もっとやってあげればよかったという気持ちです。教員の場合、家庭訪問や保護者会があり、保護者との関係も必要ですが、未経験なのでどれだけやるのかは未知数です。やるまで不安です。

後輩へのメッセージを。

平野 いろいろな経験をしてほしいということです。4年間、自由な時間がたくさんあります。2度とない大学生活、勉強以外にもクラブ、アルバイト、ボランティア、旅行、遊び、何でもいいので多くのいい経験をしてほしいです。



中学校教員養成課程 数学専攻
平野 彰友さん(22歳)
▶▶ 兵庫県・中学校(数学)採用内定

【訂正とお詫び】

本誌前号(VOL.16)7ページ下段2行目、「教育実習学生奮闘記2」の記事中、「…児童の8割が在日韓国人の家庭の子どもたちです。」とありますのは、実習校である大阪市立御幸森小学校を示す事実と反するものでありました。つきましては「…児童の大半が韓国・朝鮮にルーツをもつ家庭の子どもたちです。」と訂正し、お詫びいたします。(広報室)

人と出会うことが、人格の幅を広げることに!

教師をめざしたきっかけは。

山中 母が養護教諭で、楽しそうに仕事をしているのを幼い頃から見ていました。父も一時、教職に就いていました。教師って素晴らしい職業だなと思っていました。小・中学校の担任も尊敬できる方ばかりで、教師への夢がふくらんでいきました。

大学4年間はいかがでした。

山中 高校時代から始めたバレーボールを大学時代も続け、仲間との友情をはぐくんできました。一方で塾でのバイトや、ボランティア、堺市の小・中学校でインターンシップに参加し、教えるという活動に取り組みました。人に教えることは、自分が学ぶということだなと感じました。忙しい日々でした。

学校現場への期待や不安はありますか。

山中 不安がないといったら嘘になりますが、今まで教師になるために学んできた

こと、よく自身の全人格が試されるということで、どこまでやれるのかなという漠然とした不安はあります。小学生は教師の影響が大きいからです。

教職をめざす後輩へのメッセージをお願いします。

山中 とにかく、4年間にいろいろなことに挑戦し、経験を積むことが、教師としての引き出しを多くもつことにつながります。よくも、バイトとボランティア漬けの日々を送り、旅行もたくさんしました。「こんなことしていいのかな」と思ったりしましたが、一見、無駄ではないかと思われる経験が、教員採用試験の面接で生きたと思っています。いろいろな人と出会うことが、人格の幅を広げることにつながると思うのです。

それから、入学して1年目は、教育の歴史や語学など、教養に関することのカリキュラムが多いですが、しっかり受講すること



小学校教員養成課程 人文・社会系国語専攻
山中 大輔さん(23歳)
▶▶ 堺市立小学校教員採用内定

が必要だと思います。2～3年生になって、本格的に教職を学ぶ段階になって必ず生きてきます。

YOU CAN DO IT!

卒業予定者INTERVIEW

人生にとって貴重な体験、シューカツ楽しんで!

絞ったらいいか分からない」と訴えます。でも大丈夫です。わたしも最初はどの業界に進むか漠然として、3～4か月は手探り状態でした。

エントリーシートや履歴書はうまく書くことができたのですか。

黒田 それが、最初、志望動機欄に何を書いたらいいのか迷ってしまいました。でも、何社も受け、人事担当者の方とやりとりをするうちに、自分自身の志望をだんだん絞ることができたのです。例えば、最初は自動車販売会社の営業マンの格好良さに惹かれたのですが、企業理念や雰囲気を知るにつれ違和感が出てきました。わたしの希望と、ちょっと違うのではないかなと。ずっと食品会社で接客のバイトをしていたので、次第に、食品業界で接客の仕事をしたいと思うようになりました。自分を振り返る自己分析シートがすごく役に立ちました。

就職活動一本だったのですか。

黒田 勉強以外にあえてバイトもしましたし、自動車教習所にも通いました。面接での体験や感想を、バイト先の店長に聞いてもらい、アドバイスもしてもらいました。多忙にすることで、気分転換にもなり、逆に就職活動に集中できたように思います。

これはしといたほうがいいのかという秘訣はありますか。

黒田 就活日記を付けたらいいと思います。わたしはノート3冊にまでなりました。メモでびっしりです。面接での感想や周りのアドバイスで勉強になったことなどを書き留め、次の就職活動に役立ちました。

いわば、闘いの足跡を記した記録ですね。最後に後輩へエールを。

黒田 人生の大きな勉強になるので、シューカツ楽しんで!ということですよ。新しい発見があるからです。人生にとって貴重な1ページになると思います。



教養学科 芸術専攻 音楽コース
黒田 恵理さん(22歳)
▶▶ 和菓子メーカーに内定

就職氷河期の再来と言われ、過酷な就職戦線がメディアで報じられていますが。

黒田 たくさん受けると気持ちを伝えることができなくなってしまうのではないかと考え、わたしは20社あまりに絞ってエントリーしました。後輩に言うと、「何に



写真は、教員免許状を取得して卒業する学生を対象に実施した「教職実習演習プチ研修＝気持ちにより添う保護者対応のあり方」のひとつ

本学では、教員の養成・採用・研修を通じ、生涯にわたる教員のライフステージに応じた教員としての専門性と力量の形成に関する研究を進めるために、昨年7月、「教職キャリア・力量形成研究会」を設立しました。島教授は実践学校教育講座の森田英嗣教授とともに代表を務めており、教職教育研究開発センターが事務局的な役割を果たしています。

「研究会」では現在、教職の力量形成に必要な資質能力の解明や、現行の教員養成教育と教員研修の内容改善に役立てるために、府内の公立小・中学校に勤務する初任者及び教職経験2、3年目の若手教員約800人を対象にアンケート調査を実施しています。その結果は近く集計・分析され、大学教育へはもちろんのこと、学校現場にもフィードバックされます。

「子どもたちの学力問題がクローズアップされる中、社会の変化に対応する人間形成、人材育成をするためにどのような実践的な教育をしたらいいのか。そのアプローチとして現職教育の中身を充実させることがあります。大学の4年間に、生涯にわたって成長し学び続ける生き方のできる教師を育てることが問われています」。さらに「人を育てる仕事、教職に就くということは、そういう生き方を貫くことです。その決意のない人は教師になってはいけないと思います」ときっぱり。学校現場か

ら提起されている「即戦力」については、「教師に成り立ての人が子どもと向き合っている良い授業をすぐにできるには無理が多いのです。教科の専門性、コミュニケーション力など、様々な議論がありますが、生涯学び続ける教師としての基礎的な素養＝実践力を身につけさせることに重点を置くべきだと思います」それを解明し、一定の方向性を示すのが「研究会」のミッションで、今回のアンケート調査がその手がかりになると強調します。

アンケート調査は問います。教師に成り立ての若い先生が、実際、学校でどのような問題に悩んでいるのか、大学教育で学んだことが役立ち対応できたものはあるのか、反面、陳腐化し役立たなかったことはないのかなど、実践力という視点から27の質問項目を挙げています。

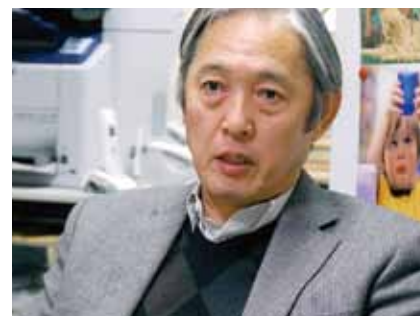
調査研究はインタビュー形式でも実施しています。島教授は、若い教員たちのもとにでかけ、語り合う機会をもっています。

「先日、新任研修会で34人と話し合いました。そこで『教師をやって良かったと思った経験はありますか』と尋ねたところ、ほぼ全員があると手を挙げました。わたしにとっては予想を超える結果でした。学校には日々、感動体験があるからだというのがその理由でした。そういった各人の感動体験を吸い上げ、フィードバックしていきたいのです」調査では、「どうして教師に

なったのか」「1年目と現在とでは自信の度合いはどうか」など多岐にわたっており、結果がまとまるのが楽しみです。

「この調査研究では仮説を立てています。教師が成長している元気な学校とは、同僚が互いに評価し合い、サポートし合うシステムが組織として整っている学校ではないかということです。どのような結果が出るのか、わくわくしています。教育委員会、校長会からも多大な協力をいただいております。大学のカリキュラム改善に役立てたいので、事務方をはじめとした大学全体のサポートをお願いしたいのです」

島教授は、松原市立中学校教諭時代、人権教育の実践に取り組みました。また大阪府教育委員会事務局での勤務時代は、10年間の教育施策の計画をまとめた教育改革プログラムの策定などの仕事に携わりました。大学では、学校現場や教育行政での経験を生かした実践研究に今後も精力的に取り組んでいきたいと決意を語っています。





写真は、1回生英語科「世界のタワーの過去・現在・未来」のミニトークを作る授業のひとつコマ

いよいよ小学校外国語活動元年がスタートします。

現職教員だけでなく、小学校教員をめざす学生にも、プレッシャーを感じる人が少なくありません。二部小学校教員養成5年課程では、学生による模擬授業や訪問授業を行いながら教授理論も学べるように授業を展開しています(Learning by doing)。

研究分野は第2言語習得理論に基づく指導法です。「英語教育の実践研究は、中学・高校も含めた日本の英語教育の在り方そのものを見直すきっかけになります」そのためには、「事例学習」を通して英語を学ぶ面白さを子どもたちに知ってもらうこと。まさにその表現を使いたくなる場面で、英語の表現をまるごと聞いて真似るという学び方を作り出していくことが必要です(Usage-based model)。また、事例学習には『関わり合う相手』が重要です。ですから実践学校教育講座の英語授業では、学生どうし『英語』を使い続ける経験や、ALTやネイティブ教員を招き、文化の異なる人と『協働』する経験を大切にしています」



子どもが英語の音声を真似て覚えるという営みは、認知言語学では、ことばの仕組みを「推測する」という認知プロセスを与えていることになります。この時「事例学習」の積み重ねは「文法への気づき」を生み出し、その後の規則学習を「おもしろい」と感じさせる可能性さえ秘めています。

柏木先生は、奈良市立小学校教員を19年務めたあと、同市教委で英語科の指導主事となりました。「ハローイングリッシュ事業」を担当し、多くの外国の方と出会い、奈良公園でインタビュー番組を制作しました。1998年から2001年までヨーロッパ・大西洋カナリア諸島に滞在しました。そこでの日常会話はスペイン語、英語はヨーロッパの人との共通のツールでした。

「文法を学ぶ前に、言葉そのものを音声として吸収し、生活で使っていました。まさに「事例学習」体験。その後に集中して学んだ文法はおもしろくて仕方ありませんでした」

小学校教員にとって英語は世界と直につながるためのツールです。「二部の学生は、昼間に仕事やボランティアなどの経験が豊富で、子どもたちを盛り上げる技術をもっています」「今の学生たちは、インターネットネイティブ世代。海外の情報をとりいれてプレゼンやスピーチを行いながら英語を磨けば上手になるはず。将来的には海外教育実習も可能だと思っています」

す」

実践研究では年間20以上の小・中学校に出張授業します。英語で授業をすることは基本で、子どもの発話やリスニングクイズの結果などを丹念に観察し統計手法を用いて検証しています。そのうえで、効果があると検証できたものを、論文として発表し、日本でも使うことのできる教授法として勧めています。

研究上で生まれる成果には、アニメーションを取り入れたICT教材の開発、英語絵本の効果的な導入、ALTとのチーム・ティーチングやペアワークの指導法、フォーカス・オン・フォームの指導法などがあります。「授業がよければ子どもは深く学びます。教師にとっては授業が命、教育現場での経験を生かして学びのネットワークを広げていきます」

学生による訪問授業



卒業生CATCH!

CATCH!

Takeshi
Furutani



教師になりたい
という思いを
持ち続けて



古谷 武志さん

第二部小学校教員養成5年課程
2005年3月卒
大阪市立 聖和小学校教諭

■ 2005年4月・大阪市立聖和小学校赴任

「卒業式まであと24日」6年1組の教室の壁には、スローガン風に掲示がかけられています。今春、教師になって初めて担任として卒業生を送り出します。広報担当者が2月14日に教室を訪れたとき、先生のモチベーションはかなり上がっていました。

参観した授業は国語科の読み物教材『海のいのち』（立松和平作）の学習でした。熱く子どもたちに語りかける先生の姿が光っていました。

「主人公の心情の変化を読みとってほしいのです。子どもたちにとっては小学校時代最後の国語科ですから」

6年前に初任で聖和小に採用されてから毎年のように研究授業をしています。今年度も、校内研究のほか大阪府教委「学力向上クリエイト研究」、大阪市小学校教育研究会の総合研究発表会で公開授業を行い、他校の先生方に参観してもらいました。「研究授業をすると、力不足が浮き彫りになりますから必死です。鍛えられます」

「体育主任、研究活動や学校行事のほか、学校運営の中心になっています。今後、大阪市の教育を担ってもらわないといけません」と大賀拓司校長は話します。

京都府の出身。中学校教員をめざしていましたが、一年浪人をしたので、「親に金銭的な負担をこれ以上かけたくない」と、昼間働きながら教員免許が取れる大学をさがしました。そして、第二部小学校教員養成

5年課程と出会いました。

「国立大学で授業料が安く、アクセスもよい。夜間に通えるのでアルバイトもできる。卒業すれば教員になることができる。こんな大学は全国どこをさがしてもありません」

11年前の入学手続きでの印象が強かったと言います。終えて会場を出ると二部先輩らによる歓迎を受け、感激したといいます。「なんてアットホームな大学なのだ」翌年は自ら新入生を歓迎する仲間の輪に入っていました。

「天王寺キャンパスでの5年間は本当に楽しかった」一番の思い出は、学生自治会に当たる「学生局と企画局」を立ち上げたことだといいます。

「わたしたち二部学生の思いを大学側に採り上げてもらえるよう、自治会準備委員会を結成し、委員長も務めました。教官や事務局の皆さんに何度も訴え、交渉を行いました。一方では、様々なサークルにも参加しました」

大学5年間は、奨学金とアルバイトで生活費と学費をまかないました。講義が始まる夕方6時まで、様々な会社で働きました。事務処理や接客、お辞儀、名刺の出し方など、社会人としてのノウハウを覚えさせてもらったといいます。

「大学の講義は楽しかったです。当時は意味を理解できないものもありましたが、

研究の仕方を学んだことが大きかったと思います」

在学中は、課外活動にも参加しました。「自分たちで運営していく活動経験も、いまの学級運営につながっています。また、企画局で取り組んだイベントは、準備、手配、段取り、片付けなど、学校行事を進めていくうえで役立っています」

「教師は楽しいです。しんどいことはたくさんありますが、一人で抱え込まず、仲間や上司に打ち明けて相談すること。教師になりたいという思いを持ち続けることが何より大切です」

もうすぐ卒業式。「泣いてしまわないかいまからときどきしています」





一人ひとりに 細やかな目配り



吉原 侑理さん

障害児教育教員養成課程
2010年3月卒
堺市立 金岡南小学校教諭

■ 2010年4月・堺市立金岡南小学校赴任
堺市独自採用一期生

今年度、採用されたばかりの1年生教員。2年3組(32人)の担任です。大学時代は障害児教育教員養成課程で学びました。障がい児と交流するサークル「どんぐり」の活動に4年間関わってきました。

「学生時代から障がいをもつ子どもたちと交流しましたから、どのように働きかけたら、子どもがこちらに関心を示し、学習に向かってくれるのか、学生ボランティアという未熟な立場ながら試行錯誤を繰り返しました。その時に積んだ経験が、今、小学校教員となって、多くの子どもたちとコミュニケーションを取るうえで役に立っているのかなと思っています」

なにか壁にぶつかったら学年主任の先生にすぐに相談するといいます。

「教室が隣同士で助かっています。学年の他にもたくさんの先生が親切に相談に乗ってくださるので、働きやすい職場です。今は多くの先生方から研究授業をみてもらい、専門指導員や教務主任の先生から、適切なアドバイスをたくさんいただいています」

毎朝、誰よりも早く出勤するといいます。「先日、インフルエンザで学級閉鎖となり、子どもたちがいない教室は寂しかったです」毎朝、子どもたちの元気な顔を見るのが、吉原先生の元気のエネルギーです。

「授業技術はこれから勉強ですが、子ども一人ひとりに向き合う姿勢が細やか。子どもの目線に立って指導ができています。

例えば、子どもたちの書いたノートを見ると、どの子ども丁寧に整理されています。低学年の子どものノートは乱雑になりがちですが、一人ひとりに指導が行き届いている証拠です」「向上心が強いので、実践を積んでいけば専門家としての教師になれる先生です」と西村茂樹校長は語ります。

小さいときから子どもの面倒をみるのが好きで、小学校教員になりたいという未来予想図は高校時代にはっきりと固まったといいます。

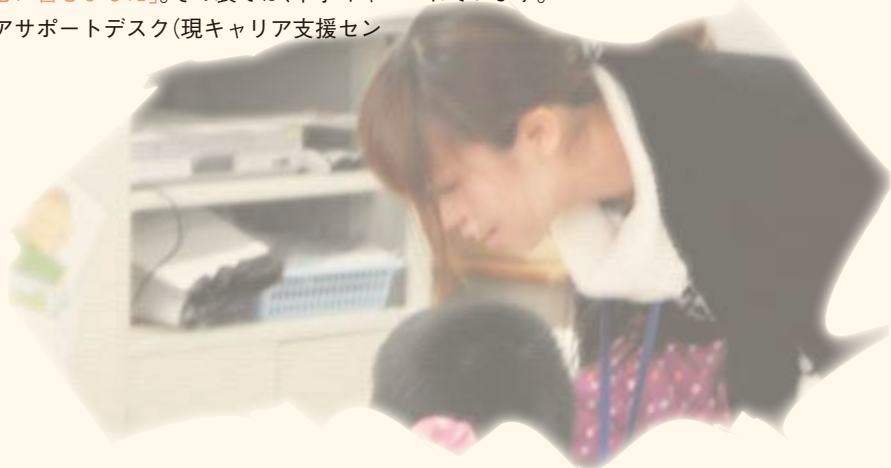
堺市は2010年度から独自に教員を採用するシステムになりました。その第一期生です。「『人物重視』で、集団討論、面接などで自分をトータルで見られる選考システムがわたしに合っていました。お陰で、自分をアピールすることができ、チャンスをものにできました。『あなたの夢とよさを受け止めます』というキャッチフレーズも心に響きました」。その裏では、本学キャリアサポートデスク(現キャリア支援セン

ター)の指導を受け、仲間同士でかなり面接練習を積んだということです。

教育実習も非常によかったといいます。「小学校と特別支援学校で実習をすることができました。授業もあらゆる教科を担当でき、また、教師の仕事、教師同士の連携とはどういうことなのか、『教師の仕事』の現実を知ることができました」

高校時代は3年間ダンスに夢中になるなど、体を動かすことも好きだとか。

これからも堺市の教員をめざす後輩が続きます。「教師という仕事は、一筋縄ではいけないと思います。しかし、その分やりがいもあります。日々、子どもたちと向き合う中で、子どもの成長を感じ、さらに自分自身も成長することができます。これからも一人ひとりの子どもたちに寄り添う姿勢を忘れずにいたいです」。数年後には堺市の教育を担うリーダーとして期待されています。



卒業生CATCH!

CATCH! Mayuko Morita



仕事も遊びも
メリハリが大事



森田 麻有子さん 小学校教員養成課程
2006年3月卒
寝屋川市立 第五小学校教諭

■ 2008年4月・寝屋川市立第五小学校赴任

「いっぱい悩んでかしこくなるう」

そう呼びかけながら、机間指導で一人ひとりに目を配り、つまづいていそうな子どもたちのそばに行っては耳を傾け、学びを支援します。時には厳しい指導を入れるときもあります。

この日(2月3日)は、担任している5年5組(37人)の算数科の授業です。サッカーのゴールを取り入れ、わり算を使って、一番うまくゴールをしたチームを調べる学習です。子どもたちはグループごとに意見を交わしながら、答えをまとめ、みんなの前で一生懸命に発表しまし

た。

「とにかく元気のいい先生です。子どもの理解が丁寧で課題のある子どもへの対応もできています」と高須郁夫校長は頼もしげに語ります。

児童数1,000人を超えるマンモス校。赴任3年目の先生です。教職員数77人の大所帯で活気のある学校です。校区の寝屋川第六中学校で地域住民のお祭りがあると、同僚とバンド演奏で参加します。

大学時代は女子サッカーの副キャプテンを務めました。専門は体育科です。校内マラソンの指導にも活躍しています。

「大学時代はサッカー漬けであまり勉強してなくて」と苦笑い。でも、「チームを通して仲間を大切にすること、感動をいっぱい味わいました。チームを1つにまとめることは、学級運営に役立っています」

小学校時代に出逢った担任の先生に憧れて教職を意識したと振り返ります。サッカーにも小学校時代に出逢いました。中学高校と続け、大学進学を考えたとき、

サッカーの強い大教に魅力を感じたと

います。「インカレに4年間、連続出場したのですよ」と目を輝かせます。

「メリハリをつけること。しかるときもほめるときもしっかり本気でと心がけています。指導を入れたときは子どもが納得してくれるよう最後まで向き合うようにしています」「でも時には先生だって失敗するのよと話します。子どもにとってお姉さんのような存在でもいたいからです」

教職をめざす後輩に対しては、「保護者対応が言われますが、毎日一緒に過ごす子どもの指導にしっかり取り組み、自ずと理解されると思います」

「自分でなにかも抱え込まない。なんでも周りの先生に相談すること。同僚、先輩、管理職の先生方、悩んでいるときに親切に教えていただけるので本当に助かっています。でも、その中から自分で納得したものだけを取り入れるようにしています」自分をしっかりもったたくましさを感じました。

「とにかく体を動かすことが好き」。休日は、スポーツを楽しむことが多いといいます。冬は雪山に、スノーボードに出かけます。時には“昔取った杵柄”でフットサルを楽しむこともあるとのこと。「同期や同僚と集まると、担任している子どもの自慢で盛り上がりますね」仕事も遊びもメリハリが大事ということのようです。





CATCH!
Rumiko
Ozawa



尾澤 るみ子さん

中学校教員養成課程 1974年3月卒
特定非営利活動法人 HIVと人権・情報センター
理事・関西支部代表

- 1974～2010年
………箕面市・豊中市内の公立中学校教諭
- 1994年・同センター会員
- 1998年・大阪府人権教育研究協議会
男女共生部会参加
- 2007年・同センター理事
- 2009年・同関西支部代表

先生自身が 教師の仕事を 楽しくやる



昨年12月24日(金)、『カップルの付き合い方を考える』をテーマにした第6回「ジェンダーとセクシャリティ」の授業が柏原キャンパスで開かれ、尾澤さんが講師を務めました。柏原キャンパスでの講師はこれで3回目です。

今回の授業は、教職教育研究開発センターの神村早織准教授が担当で、中学校現場で性教育や男女共生教育を長く実践していた尾澤さんを外部講師として招きました。

授業のキーワードは「デートDV」。恋愛関係にある若者のカップルの間で起こる暴力のことです。

授業では、ドラマ「ラストフレンド」のシーンが上映されました。そのうえで、デートDVの兆しである、彼からのデートの誘いをめぐる恋人同士の言い争いの一場面を、尾澤さんと神村准教授がショートコントで演じました。それらを受けて、学生たちは、DVの危険性をはらんだ自身の言動を振り返り、グループで討議、発表しました。

「みなさん、過去の自分を振り返ることで、ビデオやショートコントのような経験はありませんか」「みなさんは教員になったら、担当している生徒からこのような相談を受けることがたくさんあります。今から学んでおく必要があります」と巧みに声をかけます。

授業のクライマックスで、「デートDVは、男女の親密な関係を必ず破綻させ、ストーカー行為に発展したり、時には殺人にまで至ります」と強調し、「DVを防ぐには互いのコミュニケーションが非常に大事」などと実演を交えてアドバイスをしました。授業のまとめとして、最後に「皆さんは、(DVの)被害者にも加害者にもなってはいけない」とメッセージを投げかけました。

尾澤さんは、昨年度まで箕面および豊中市内の市立中学校で理科の教師として36年間勤務。現在は、在職中にも関わっていた「HIVと人権・情報センター」に本格的に参画しています。「性に関する指導がライフワークです。教えることでエイズの問題をはじめ様々な課題を学ばせていただいています」

小・中学校から大学まで年30回以上は出張授業に出かけ、児童・生徒に直接訴えています。「どの学校でも、身近な性の問題を切り口に、子どもたちは自分とは何か、命の大切さについて、とても話してくれます」

同センターでは、エイズ予防啓発コミック『すとーりあ AIDS』(A5判・112ページ、定価1,050円(株)解放出版社刊)＝写真＝も発刊。「大学生が自分のことを再確認したり、学校現場で教材として先生たちに使ってほしい」としています。

学校現場を離れて、第三者の立場になったからこそ一層学校教育への思いが熱く

なったのではないのでしょうか。

「“授業は面白くわからないといけない”がモットーです。第一線を離れたとはいえ、わたしのように教師を退職した団塊の世代に、実践家がたくさんおられます。わたしたちには、今まで習得したノウハウを後輩に伝える使命があると思います。大阪教育大学は、そういった人材をもっと活用してほしい」と力説します。

教職をめざす後輩に対して、「教師を楽しもう」とエールを送っています。「子どもたちにとって、親以外では一番身近な大人が教師です。そのためには子どもたちに信頼される先生にならないといけません。親の生活がしんどいこと等から、大人に対する不信感を抱いている子どももいます。その子たちの生の声を聞く姿勢が求められます。まずは先生自身が教師の仕事を楽しくやる。そのことが子どもたちにいい影響を与えます」



附属学校園ウォッチ

「創造性を育成する授業」を探究

附属天王寺小が研究発表会



附属天王寺小学校は2月19日(土)、全国から約1,200人の教員の参加を得て研究発表会を開きました。

天王寺地区の共同の研究テーマである「人間と科学の調和を拓くリテラシー教育」を受け、今年度から「創造性を育成する授業」を研究主題とし、学力の主な要素と評価の関係を「創造性」とすることで授業のあり方を提案していくことにしました。

当日は、21の公開授業と教科別分科会で、1年次に取り組んだ実践の成果が発表され、各教室は参観者であふれました。

このあと、シンポジウム「学校教育と創造性について」が開かれ、各教科の研究者が授業の指導過程における創造性の育成に触れました。

パネリストは松山雅子教授(国語科)、松本勝信教授(理科)、入口豊教授(保健体育科)、藤永芳純教授(道徳)の4人で、林龍平教授(教育心理学、天王寺地区共同研究協議会アドバイザー)がコーディネーターを務めました。



個の考える力を 育てる授業づくり

附属平野小が授業研究会



附属平野小学校は2月4日(金)、授業研究会を開きました。

今回の研究会は、全教科、道徳、総合的学習、英語活動を全学級で公開しました。研究テーマは、「学び合い活動を通して個の考える力を育てる授業づくり」と設定しました。公開授業では、「学び合いの場」において、どのように「ことば・体験・コミュニケーション」に着目することが有効であるのかを提案し、分科会において、よりよい「学び合いの場」について討議しました。参加者は、全国各地より来ていただき、多くのご意見、ご感想をいただき、充実した授業研究会となりました。

平野五校園は、校種間連携型一貫教育を推進して共同研究を行っています。今回の授業研究会での成果や課題が共同研究の促進にもよい影響を与えたいと思います。今後も子どもの育ちを軸にした研究活動を推進していきたいと思っています。

「自立し協同する力を育む教育」を テーマに 池田キャンパスの小・中が研究発表会

本学池田キャンパス小中高は、今年度から「自立し協同する力を育む教育～コミュニケーション力を基盤として～」をテーマに共同研究を進めてきました。その1年次の研究成果を小・中学校が相次いで発表しました。

附属池田小学校は2月10(木)・11(金)の両日、教育研究協議会を、「学校安全研修会」「道徳教育研修会」と併せて開催し、全国から約760人の教員が参加しました。

10日はこれまで取り組んできた安全教育や学校安全への取り組みについて公開授業と研究協議会で発表するとともに、安全意識の高揚と不審者対応のスキル向上をねらいにした同校教員による不審者対応訓練を初めて公開しました。また、文部科学省の教育課程特例校として取り組んできた「安全科」の概要を報告しました。さらに、WHO認証

の「International Safe School」について報告し、「安全教育は命の教育である」という安全教育における基本理念について、実践事例を交えながら発表しました。11日には研究テーマに沿った教科別の公開授業と授業研究の協議会が持たれました。

附属池田中学校は2月18日(金)、池田キャンパス共通のテーマで教育研究会を開き、約150人の教員が参加しました。

中学校では、コミュニケーション力の土台として、各教科で言語活動を重視した学習指導を共通の柱とする授業実践を進めてきました。その成果の一端を各教科の公開授業と分科会で発表しました。

このあと、本学の成山治彦理事が「PISA型学力を伸ばす授業づくりー自立し協同する力を育むために」と題して講演を行いました。

01 「DAIKYO PRESS」がフリーペーパーを発行



学生目線で大学情報を発信する学生広報グループ「DAIKYO PRESS」(大教プレス)が、初めてフリーペーパーを発行しました。

大学の新たな一面を学生や教職員に知ってもらうために発行されたもので、A4判・4ページ(カラー)。

教育実習のこつやサークル紹介、アンケート調査など、学生にとって役立つ記事が楽しく掲載されています。フリーペーパーを

手にした学生は「身近な友達や情報載っていて楽しい」「実習のこつはとても役立つ」など話していました。

記事を企画、取材した学生広報スタッフは「予想以上にたくさんの方が手にしてくれて嬉しい」「4月からはもっと多くの学生と一緒に作ってきたい」と話しています。フリーペーパーは定期的に発行予定で、次号は4月下旬発行予定です。

02 サッカー部体育会出身の田中さん、J2「ロアッソ熊本」と契約

日本プロサッカーリーグ・J2「ロアッソ熊本」に加入が決まった本学の体育会サッカー部、田中俊一さん(小学校教員養成課程・理数生活系・数学専攻)が、株式会社アスリートクラブ熊本本場で「ロアッソ熊本」と正式契約を交わし、背番号26のユニフォームが決定しました。

契約書にサインした田中さんは、背番号26の自分のユニフォームを着て、総監督・GMの池谷友良さんと固い握手をかわしました。

「ロアッソ」は熊本で唯一のプロスポーツ団体で、県民の応援は熱いものがあります。サッカー部の入口豊監督(教員養成課程 保健体育講座教授)は「国立大の星として、レギュラーの座をつかみ、J1のピッチに立つ姿を見せてほしい」と話していました。



(写真提供:株式会社アスリートクラブ熊本)

03 「これだけは伝えたい」小学校外国語活動のシンポジウム

「これからの小学校外国語活動—必修化を目前にして、これだけは伝えたい—」と題したシンポジウムが、2月6日(日)、天王寺キャンパスミレニアムホールで開かれました。全国の大学で教員養成に携わっている研究者と教育現場で英語を教えている実践者を講師に迎え、学生や小・中学校



の現場教員など約90人が参加しました。

これは、平成21年度の文部科学省「大学教育・学生支援推進事業(テーマA) 大学教育推進プログラム」に採択された「教える「英語力」向上プログラムの構築」の一環として実施されました。

『明日の授業に必ず役立つワークショップ』をコンセプトとし、「英語ノート」の活用方法や指導工夫、歌や文字遊びを通じての活動紹介を提案し、ペアワークでロールプレイなどを繰り返しました。パネル討論では、今年4月に迫った小学校外国語活動の導入に向けて、現職教員のパネリストが「これだけは伝えたいこと」を提案し、評価の観点や指導体制などについて参加者と活発な議論を交わしました。

参加者は「子どもたちの心が動く指導方法の紹介を、これからたくさん公開してほしい」「ワークショップは具体的でわかりやすく、これからの授業イメージをつかみやすいものだった」と感想を述べていました。本学では、今後も小学校外国語活動のシンポジウム等を実施します。

「教える『英語力』向上プログラムの構築」webページ

<http://www.bur.osaka-kyoiku.ac.jp/kikaku/program/egp/>

本誌にご意見をお寄せください。

広報室では、今後の誌面作りに皆様のご意見を積極的に取り入れていきたいと考えています。ご感想やご意見、大阪教育大学についてお知りになりたいことなどを、はがきまたはwebアンケートでお聞かせください。

天遊 vol.17 webアンケート



「天遊」とは

「天遊」は、荘子の言葉から引用されたもので、人間の心の中に自然に備わっている余裕をあらわしています。キャンパス統合移転の記念に旧師範学校以来の同窓会3団体から寄贈された記念碑に銘文として刻まれています。記念碑の揮毫は、水嶋昌(山耀)本学名誉教授によるものです。



本紙は再生紙を使用し、環境にやさしいベジタブルインキで印刷しています。この印刷物は、20,000部を911,000円で、すなわち1部45,555円で作成しました。



料金受取人払郵便

柏原支店
承認

8

差出有効期間
平成23年9月
30日まで

切手不要

郵便はがき

5 8 2 8 7 0 5

(受取人)

大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1

大阪教育大学企画課
広報室行

※該当する番号を○で囲んでください

あなたのご所属を教えてください

- | | | |
|----------|---------|-----------|
| ①本学関係者 | ②高等学校生 | ③小学校教員 |
| ④中学校教員 | ⑤高等学校教員 | ⑥教育委員会関係者 |
| ⑦他大学教職員 | ⑧他大学学生 | |
| ⑨その他 () | | |

①と答えた方は以下から該当する番号をお選びください

- | | | |
|---------|----------|----------|
| ①学生 | ②大学教員 | ③大学職員 |
| ④大学保護者 | ⑤大学卒業生 | ⑥附属学校教員 |
| ⑦附属学校教員 | ⑧附属学校保護者 | ⑨附属学校卒業生 |
| ⑩名誉教授 | ⑪その他 () | |